

日本の貞操

水野浩編

日本の貞操

外国兵に犯された
女性たちの手記

水野 浩 編



目 次

日本の貞操

第一部 死に臨んで訴える……………《小野年子》……………五

第二部 私は誰に抗議すればいいのか……………《河辺さと子》……………一四

第三部 妻となつた私の苦惱をこえて……………《杉田朋江》……………一八五

第四部 私の生涯を踏みにじつたもの……………《浜田三枝子》……………二三五

編・著者の後記

第五部 日本の貞操は奪われている……………《水野 浩》……………二五七

——姓名は本人の希望によりいづれも假名——

日 本 の 貞 操

死に臨んでうつたえる

小 野 年 子

はじめに

表紙がすりきれて、ばらばらになつたのもいれて、私の枕もとにいま六冊の手帳がある。茶、緑、赤——とりどりの表紙。……それだけが私と一緒に、これまでのさまざま辛い目に堪えてくれた。そして私の「昨日」のすべてを知つていてくれるのです。

けれども、これともお別れする日も、そう遠くないような気がする。まだ二十三才なのに、私は「ガン」なのだ。もつともそれなしでもVI・D・の巢の私のからだ——。とうとうくるところまできてしまつた私という女の最後に、これはふさわしいかもしれない。そう自分であきらめる以外にないのが、私の二十三才の運命なのだろうか？　しかしこうしてじつとして考えている

と、死を宣告された人間の苦悩をふくめて、何かこの耐えられないおもいの一切を吐きだしたくなる。

私をこんなにしてしまったのは、もちろん私の弱さからきたに違いないが、しかし私だつて何も好きこのんで「バンバン」になつたのじゃないのです。——私をこうさせたにはそれだけの原因だつてある。いままで私は一度だつて口にしなかつたが、いまになつて「ガン」と診断され死を目前にしたとき、私はおさえられない自分にたいするあわれみと怒りがこみあげてくるのをどうしようもない。私という汚された女の血を吐く苦しみを、幸福な日本の女性たちにせめて少しでも告げ知らせたい。

私の洗いざらいの告白には、そして憎しみがこめられるでしょう。だが、私は復しゅうを心に秘めた屍なのだから、それは当然でしょう。わかってくれるひとだつて、きつとあるに違いない。たとえばどういわれるとしても、私自身これ以上、だまつて死んでいけるだらうか？

私はかせぎためたわずかなマネーと、一般の人たちにはとても判らない、「バンバン」の友情と援助でかろうじて生きながらえられる。彼女たちの私にたいするあわれみは、私を餓えさせはしないのだ。その肌にじかにふれてくる彼女たちの人生からきた自分以下の者への同情は、いま

の私には闇夜のともしびのようなものだ。種の運命が彼女たちの運命ではないと誰がいえよう。そう思うにつけても私は、この私のような女の死と告白を世間の人たちにきいてもらいたい。私はまだ「ガン」のからだでも、坐ることも、ぼちぼち書くこともできる。私は自分の死にそなえて、心の苦しさを整理するためにも書くことにしよう。これがねむれぬ夜の苦悩のあとで、私がやつと考へついた自分を救う方法なのだ。

さいわい私の手許には、六冊の手帳がある。この手帳を書き写しながら、私は私の二十三才の生涯の破滅のみちすじを辿つていこう。そのすべてを少しもかくすことなく、ここに書きしるそう。私のこの訴えはきつと声がほそく、みだれがちになるだろう。しかも地獄のような「パンパン」生活に麻痺してしまつた私の感覚は、きつとズレているにちがいないのです。いいえ、ズレているというより、恐ろしい心と身体の浪費にむしばまれていることは、私の病氣によつても証明されていましょう。

けれども、私はそれらの障害をこの焦慮の羽搏きによつてとびこえることができるはずです。それにいまになつても、おもいかえすごとに灼けつくような痛みをともなつて私をつきやる「最初の責苦」の記憶は、私の復しゅう心をいよいよ燃えたたせずにはいません。こういうしだいです。すべての終了する瞬間の、私という人間のこれはいまわのあがきでもあるでしょう。燃えつ

きようとする炎の一ゆらぎに、私はいま私のおもいのありつたけを托すのです。

——一番古い、赤い表紙の手帳は、一番いたんでいない。表紙もごくそまつな紙製のこの手帳が、私の娘時代のおしまいの十カ月——一年の大部分を私と平凡に、幸福にすごしたからだ。しかしその十カ月分の頁は、いまはもうない。あのいま想つてもたまらなくなる「事件」のあとで、そこを讀んだときもう二度と娘時代を憶い出すまいと、破りすてしまったから。現在の私なら、死をまえにしたしみじみした氣持で、人並にしあわせだった日をふりかえつてみるゆとりも、氣持にできてきているのだけれど……。

ああ だがもう愚痴をいうのはよそう。

さあ、これで私は私のお話しをうちきることにしましょう。ただ一言つけくわえたいことは、このような私という「パンパン女」の死がどんな社会の片隅にはきすてられるものだとしても、いままで書いてきたようにそれにはそれだけの理由がないこともないということです。私の場合には私はこれらのことをすべての人々にきいてもらわずにはいられないのです。それは直接ではないにしても日本の女の運命とそのたたかいつながらずにはいない問題であるでしょうか？

またこの手記でくりかえしましたように私だつて、あのはじめの「事件」がなければ、こんな

死に方をしなくてもすんだと思うんです。だから、私はこのいきさつを、私の恥をしのんでさらけだしたわけです。しかもそれは私一人の問題ではないはずです。まだまだ私たちの女のよわみにつけこんで、日本の女をほしいままにするG・I・たちと、そんな受難の結果、墮落していく人々はあるにちがいない。

そう思うと私は、私の事実を証拠にして叫びたくなる。いや、私は枯れた声で、とにかくこのように叫んだつもりだ。たくさんの痛みに耐えて、私は自分の筆力の不充分にもめげず一応書きおえたのである。私はやがて死をむかえるが、そのときこの手記は私の心をいくらか勇気づけてくれるはずです。なぜなら私はいま、私自身のきたないものをふくめて一切を吐きだして、もういうことをもたないから――。

しいていえば私は私のような「女たち」のなかにも、こんな苦しみや悩みがあることをどうかしてほしいということだ。ケイベツされることは自由ですが、それ以上にどうして私たちがこうなつたかの、もつと根本の原因にまでさかのぼつてつきつめてほしいということです。これがおそらく私の、G・I・たちにたいする憎悪よりつよい、皆さんに訴えるさいごのぞみであることをどうかもう一度だけ考えて下さい。

その欺かれふみくだかれた夜

一五二も一九一五〇

今の私には、この数字の意味は、わからない。けれども、これを書いた時期は、そのあとの記事から、大体はつきりしている。多分、京都発の東京行の汽車の時間か、東京着の時間だろう。

そして手帳には一行——一字、書かれていないあのこと。……いいえ、どうして私に書きとめる氣持のゆとりなどがあつたろう？　ただ、いたたまれない想いに責められて、いきなり、こちらにきてしまったのだつた。でも、ゆとりがあつたにしても、何も書きはしなかつたろう。一日も早く忘れたいあの日のことを——。でも、一字の心覚えなしでも、私はあの日のどんな小さなことも、四年たつた今でも、何一つ忘れることができないでいる。

そしてそのことをはつきりさせるときがきている。私はその日を、私の恥辱をこえて想いかえす。——

——ちようど叔母達と一緒に、夕飯をたべかけたときだつた。——私は三月の東京の空襲で両親をなくしてから、二十三年の十月まで、ずっと京都の叔母にひきとられて暮していた——

玄關の呼鈴がなつて、私と同じ年の従姉妹が立つていった。

「こちらに、小野年子さんおられましたね」

小さいうちなので、玄關での声はつつめけに聞える。私は、おやと箸をおいた。「はい」と従姉妹が答える。

「今うちにおいでですか？」

「ええ」

「じゃ、すぐ、一緒にきて下さい。進駐軍物資不法所持の疑いでMPからの出頭命令です」

私は、くらくらめまいがした。半月ほどまえ、私と従姉妹用のナイロンの靴下と、叔母さん用にラツキーを一箱、進駐軍のものを売つてゐる店で、買ったのだつた。誰でもやつてることだし、私は別に悪いとも何とも思わずに買ったのだけれども。

みんな、眞つさおになつた。そこにおなじように蒼ざめた従姉妹が戻つてきた。

「お巡りさんよ。年子さんが、進駐軍物資、どうとかつて」

私はふらふら倒れそうになつた。叔母は私を抱きとめて支えながら、従姉妹にそつと囁いた。

「そのお巡りさん、部屋に入つてきそう？」

「ううん」

従姉妹が首をふると、叔母はうなずいて、私にささやいた。

「大丈夫よ、年子ちゃん。あんたがでてつたら、すぐ、タバコや靴下かくしちやうから。証拠さ
えなければね。アメリカさんはとてもそれをやかましくいうつてから」

私は叔母と従姉妹に兩側から支えられて、玄關に連れだされた。もちろん、靴も自分ではけ
ず、従姉妹にはかしてもらった。

後で考えると、お巡りは、玄關の隅の方に顔をかくすように立つて、そわそわと落着かない様
子をしていたのだけれども、その時は、とてもそんなことに気づくどころではなく、叔母がくど
くどと何か頼むのを、避けるように、ずっと私を連れだしたのが、そわそわしたところか、手暇
のとれるのにいらいらしてのせいかと思われた。

それにしても何というヒレツな巡査だろう。また何という恐るべきG・I・たちだろう。私は
それらをのこらずかかねばなるまい。

ところでジープはうちから随分離れたところにとまっていた。三人G・I・がのつていた。腕
章も何もしていなかったように思うけれど、それははつきりしない。けれども、その頃の私に
は、腕章をしようといまいと、おなじことだった。MPつたつて、何のことかよく知つてだ
つていなかったのだから。私がバカだったのか、そう思う人にはそういわせておくしかないの

だ。

お巡りは私をジープ後方の席に押しこんだ。運転台の二人は黙って前をむいたままで、うしろにいる一人が私を引張り上げた。

お巡りとそのG・I・が一吋あいさつみたいなことをいいあつて、お巡りはのらずにジープは走りだした。

すごいスピードで、ジープは流れるように走る。歩道の人や並木はいうまでもない、市電、走っている市電までが、後にぼんぼんとんで行く。

軍政部やなにかがたまっているあたりをすつと素通りにし、ジープは走り続けた。のろのろ走る日本のトラックをどんどん追い越して。

ああ、これは、大阪のMP司令部にいくのかしら。私は、京都にある司令部だけですまないことなのかと、胸が潰れそうな思ひだつた。いまおもえば腹立たしく、ふきだしたくなるような、私のこと……。

と、ジープはぐつと曲つて脇道にはいつた。とたんに、ジープはひどくがたがたゆれて私はあわてて、ほろの支柱を握つて、腰を少し浮かすようにした。でないと、とてもおしりが痛くてたまらなかつたからだ。

ジープはちつともためらわずにぐんぐん田舎道にはいつていく。いかにも走り馴れた道といった感じだ。

あつ、と私は氣がついた。畠道をこの向きに走つたつて、どこにもいきつきはしないのだ。畠と林と、山のほかのどこにも、進駐軍のキャンプなど、ましてあるわけではない。

うまうまとさらいだされたのだ、と氣がつくと、私は助けを求めようと首をつきだした。けれども、こんな田舎道を、夜になつて、誰が歩こう。たまにゆきあつても、またたきする間にすれ違つてしまう。私は飛降りようとして、そのスピードにちよつとためらつた。それが私の生涯をきめてしまつた。私の氣配に気づいたG・I・はぐつと私のきき腕をとらえた。そして、ジープは雑木林のなかにのめりこむように、ぶたがたつとつつこんで急停車した。

ヘッドライトは消えたが、月が高く上つて薄明るかつた。

前の席のG・I・が先に飛び下りて、うしろに廻つた。

「グラウト」

私の横に坐つたG・I・は腕をつかんだその手をぐんとついたので、私ははずみをくらつて、ジープから横ざまにころげ落ちかけた。その私を先におりた二人が抱きとるようにして、私はジープからおろされた。もうちつとも疑う余地はない。私はふり切つて逃げようとした。と、もう

一人が眼の前に立ちふさがっていた。

二人はすゝ私の両側から、腕をとらえ、セーターの両脇をつかんで、妙なかけ声をあわせて、すばと抜きとるようにぬがした。あつと驚く暇もなく、スカートのホックをはずし、スリッパを抜きとつた。

私は、悲鳴をあげ、「助けて」と叫んだ。とたんに、私は、冷水をあびせられたようにぞうつとした。三人が、声をあわせて、笑つたからだつた。一人のG・I・は笑いながら何かいつた。多分、

「もつとわめけ、もつとわめけ」

とでも、いつたのだろう。私は笑い声に、私がどんなに泣き叫んでも、誰にも聞えない場所にまで連れだされているのを悟らされた。その場所も、あのジープの走らせ方では、さらいだしてける絶好の場所に違いなかつたのだ。

女の肌につけたものを心得切っている三人連れは、私が一人で脱ぐよりも手早く、引きはぎ終ると、自分達の獲物を鑑賞でもするかのように、下着を遠くにほうりやつてから、私から少し離れた。離れたといつても、五六歩の所を、三方からかこまれて、どこに逃げようもない。月の光に照らしだされた私の素肌に、楽しげな笑い声がおこつた。その眼にたえきれずに、私はその場